

昭和時代の「人魚」像 (1)

—— 軍国主義下の「人魚」像について ——

九頭見 和 夫

I. はじめに

太平洋戦争が終結する昭和 20 (1945) 年までの昭和時代の前半期は、張作霖爆殺事件 (3 年)、満州事変 (6 年)、ドイツにヒトラー政権の誕生 (8 年)、日中戦争への突入 (12 年)、第二次世界大戦の勃発 (14 年) 等、日本のみならず世界中が戦争にあけくれ、例えばヒトラーによるユダヤ人虐殺など人間が人間として扱われない暗黒の時代であった。文学の世界も当然のことながらこのような時代の傾向と無縁ではありえない。反戦、非抑圧階級の解放を唱えた文芸雑誌「種蒔く人」(大正 10 年) や「文芸戦線」(大正 13 年) が小牧近江、青野季吉等によって創刊され、小林多喜二の『蟹工船』(昭和 4 年) 等のプロレタリア文学運動に大きな影響を与えた。一方、時代の傾向に距離を置いた作家たちもいた。斬新な感覚と繊細な表現技術によって新感覚派と呼ばれた横光利一、川端康成、中河与一、片岡鉄兵らは、「文芸時代」(大正 13 年) を創刊し、例えば川端康成の『伊豆の踊子』(昭和元年) 等が掲載された。また昭和 2 年に発生した芥川龍之介の「ぼんやりした不安」(『或る旧友へ送る手記』) による自殺が太宰治等多くの作家に少なからぬ影響を与えたことも時代を理解する上で重要である。以上の他に特に時代との関係で無視できないのは、太宰治の『花火』等当局による発売禁止処分であった。「時局に合わない」、この一言は、作家たちの活動に有形無形の圧力を加えたのである。

本小論では、前述の時代傾向をふまえ、昭和 20 年までに出版された文学作品に登場する「人魚」像の解明に努める。まず最初に、巖谷小波の童話『天の橋姫』を取り上げ、ついで小栗虫太郎の小説『人

魚謎お岩殺し』、大手拓次の詩「木製の人魚」(詩集『藍色の墓』所収) を紹介する。さらには中原中也の詩「北の海」(詩集『在りし日の歌』所収) と「北の海」を論じた丸山薫の詩「詩人の言葉」(詩集『青春不在』所収) を比較し、最後に太宰治の小説「人魚の海」(『新釈諸国噺』所収) と太宰治自身が「原典」であることを認めた井原西鶴の小説「命とらるる人魚の海」(『武道伝来記』所収) の関連を検証する。

II. 巖谷小波の童話『天の橋姫』

明治時代から昭和時代にかけて、童話作家、俳人、小説家として活躍した巖谷小波 (1870 年—1933 年) は、子供の頃からドイツ語を学び、明治 33 年から 2 年間「ベルリン東洋語学院」で日本語講師を勤める。その後早稲田大学講師、文部省の依頼で国定教科書の編纂や臨時国語調査会委員となる。一方文学活動についてみると、尾崎紅葉等と「硯友社」を創設し、中心的作家として活躍したが、彼が目されたのは、博文館に招かれて創刊した雑誌「少年世界」等に発表した創作童話によってであった。「人魚」が登場するのは、20 歳の時から約 40 年間にわたって創作した「日本昔噺 24 編、日本お伽噺 24 編、世界お伽噺百編、世界お伽文庫 50 編、小波お伽百話、同新お伽百話、同新編お伽百話」(『小波お伽全集』の「口上」)¹⁾ を収録した『小波お伽全集、第二巻少女篇』(昭和 3 年) である。童話の題名は、『天の橋姫』、以下に梗概を記す。

海底にある「人魚の淵」に棲む人魚の親子、大拔手と小安手のもとに、小安手の美貌に目をつけた「人魚の淵」の主の大黒手から、娘を嫁にくれとの申し込みが 303 粒の真珠をつないだ見事な髪

飾りとともに届けられる。大黒手を嫌う父の大抜手は怒るが、娘の小安手は立派な真珠の髪飾りに心をひかれる。そこで真珠よりもっといいものをあげると宥める父に、娘は空の星がほしいといい困らせる。空の星に執着する小安手の前に蟹があらわれ、虹の橋を昇れば、天国に行くことができ、天の川の河原にある金の星や銀の星を好きなだけとれることをつげる。

十五夜の月の夜、白い虹の橋がかかり、蟹の甲羅ののって人魚の小安手は天国をめざして昇っていく。しかし彼らに気がついた横雲は、天国への不法侵入をふせぐため月の光をさえぎり、虹を消す。虹の橋を失った小安手は大海へと落ちていく。この時下界を見ていた月宮殿の月姫が小安手に同情し、2匹の兎に小安手を助けて天国につれてくることを命じる。さらに月姫は、人魚の淵で大黒手と大喧嘩している大抜手を助けるため、龍城の龍王に大黒手の征伐を依頼し、大抜手を天上の月宮殿につれてくることを兎に命じる。天上で再会した大抜手と小安手の人魚の親子に月姫は、大抜手には「人魚の淵」の主を命じ、小安手には天上に残り「虹の橋の守」として「天の橋姫」を名づけることを許可する。感激のあまり大抜手と小安手が涙を流すと、涙はたちまち真珠よりも美しい見事な玉に変身する。

この童話に描かれた世界は、月宮殿の主の月姫と彼女に仕える兎等の棲む天上界、一方その対局として存在するのが下界、すなわち人魚たちの暮らす人魚の淵と龍王が支配する龍城のある海底、そして天上界と海底を結ぶのが虹の橋、という構成になっている。特にこの童話の構成で感じるのは、月姫と兎、人魚、龍王、虹の橋等洋の東西を問わず伝説等によくみられる構成要素が物語の中心を形成し、作者が種々の昔話や伝説等から影響を受けていることがよみとれることである。小波の経歴からはグリム等ドイツ・ロマン派の作家との関係が考えられるが、例えば『小波お伽全集』の「口上」には、小波がアンデルセンに強い関心を抱いていたことがわかるのである。

同じく13年10月、同志の人達と謀りまして、

デンマルクのアンデルセンの為に、50年祭を挙行しましたら、此事が遙にデンマルク国王に伝えられ、翌年の春其功勞に酬いるべく、ダンネプロウ二等章を贈られるなど、過分の光榮に浴したのであります。²⁾

なお「口上」について補足すると、「13年」とは、大正13年のことで、アンデルセンの表記が「アンデルゼン」とドイツ語発音になっているのは宮澤賢治の場合と同様である。しかしだれが最初にこの表記を用いたかは定かでない。宮澤賢治は、大正7(1918)年12月16日の保阪嘉内宛の葉書で、アンデルセンの『絵のない絵本』について短歌をおくり、その中で「アンデルゼン」の表記を用いている。

この童話の明るく軽快な書き出しは、アンデルセンの「人魚姫」を連想させ、例えば小川未明の『赤い蠟燭と人魚』等人魚を扱った日本の童話にみられる暗さは全く認められない。小波の「人魚」像解明のため冒頭の部分を引用する。

水や空、空や水、その水と空とが、恰度相接して見える所から、真直下に海に降りると、その海底の大岩の蔭に、人魚の淵と言つて、人魚斗り沢山棲んで居る所がある。頭わさながら人間の通り、前の鰭も人間の手に違いないが、乳から下わ正しく魚、時々海の岩の上に、其背を干して戯れて居る所わ、しばしば画工の手にも写されて居る。³⁾

「人魚姫」との大きな相違は、『天の橋姫』には人間界が存在しないことである。王子の住む人間界、人魚の棲む海底の世界、「永遠の魂」を持つ人間が死後に行く天上界、「人魚姫」に描かれた世界は大きく三つの部分に分けられ、各界を越えることは、できない。一方『天の橋姫』では、天上界の月宮殿に棲む月姫が、人魚たちの棲む人魚の淵や龍王の棲む龍殿のある海底に常に目を光らせているが、十五夜に出る虹の橋を昇れば容易に天上界に昇ることができ、差別は全く存在しない。アンデルセンの影響という観点からこの童話を解釈するならば、むしろ『絵のない絵本』(1840年)の方が重要であろう。「月」が世界中で見て来た話を、33

夜にわたって、屋根裏部屋に住む貧しい画家に話すという構成は、小波の心をとらえ、月姫や人魚を描く際の参考になった可能性を否定できないと思われる。しかし他方では、この童話が、月姫と兎、龍王、人魚などの登場者、誰でも容易に天上に昇れることなど、日本的な色彩が濃いこともまた事実である。

III. 小栗虫太郎の小説『人魚謎お岩殺し』

小説家小栗虫太郎 (1901年—1946年) は、中学卒業後印刷所など様々な職業を渡り歩いた後、昭和8年、『完全犯罪』によって彗星のように探偵小説界に登場し、江戸川乱歩に注目される。その後昭和21年に死去するまでのわずか十数年間に虫太郎は、『黒死館殺人事件』(昭和9年)、『二十世紀鉄仮面』(昭和11年)等虫太郎の幅広い知識に裏付けられた異国情緒豊かな探偵小説をつぎつぎと発表する。「人魚」が登場するのは、『人魚謎お岩殺し』(昭和10年)である。この小説も他の小説同様、探偵法水麟太郎が登場し、虫太郎が好んで取り上げる見世物小屋を舞台に発生した事件を、絶海の孤島で起きた出来事を糸口に解明するのである。

見世物小屋の座頭浅尾里虹には、人に言えないおぞましい過去がある。上方役者里虹は、畿州公姉川探鯨の正室薄雪の方と深い関係になり、琉球列島の南南東にある絶海の孤島夷岐戸島に流される。この孤島での出来事が、その後里虹の見世物小屋で起る事件の伏線となっている。

薄雪の方の生家嵯峨家の依頼を受けてこの孤島を訪れた生理学者ベルナルド・デ・クイロスは、渚で遊ぶ人魚を目撃した翌日島に上陸し、二人の日本青年と二人の嬰兒を保護する。さらに彼は、流れついた筏に括りつけられた二人の嬰兒を救助し、首も手足もない年若い女の胴体を水葬にする。その後二人の青年と四人の嬰兒は、クイロスによって日本に送還されるが、現在はいずれも浅尾里虹一座の座員で、二人の青年は浅尾里虹と中村小六、島で発見された二人の嬰兒は、男児が嵐村次郎、女児が山下久米八、筏に括りつけられた二

人の嬰兒は、山村儀右衛門と逢痴で身体の一部が接合した双体畸形の双生児(シャム双生児)、年若い女の胴体はクイロスが孤島で目撃した人魚であることが物語の展開の中で判明する。

事件は、里虹一座が上演した鶴屋南北の『東海道四谷怪談』の舞台で発生する。宅悦役の小六がショック死し、ついでお岩役の逢痴が刃物で頸動脈を切られ殺害される。さらに以前毒殺されそうになりながら生き延び仮髪師の為十郎として一連の事件に深く関わっていた里虹が青酸自殺する。そして最後に舞台を演じ終えた伊右衛門役の儀右衛門が自殺し物語は終了する。

探偵法水麟太郎の推理によれば、出生の秘密を知った儀右衛門は、「母なる人魚に、それは、わななくようなあこがれを抱きはじめ」⁴⁾、「人魚の嘆きを、父に報い」⁵⁾るため父里虹の殺害をはかったがはたせず、生き延びた里虹の策略により誤って逢痴を殺してしまったのである。なお筏に二人の嬰兒と若い女の胴体を括りつけて流したのは里虹で、流刑から赦免されるにあたって不都合な過去を消し去るためであった。

この物語で「人魚」は、事件を解決する重要な鍵をにぎっているが、実際には物語にはほとんど登場しない。ここで琉球の孤島に生息した虫太郎の描く「人魚」像を分析する。

上半身は、それは美しい女体であるけれども、腰から下は暗い群青色に照り輝いて、細つそりと纏った足首の先には、やはり伝説通りの尾鰭があつた。彼女は猫のようなしなやかさで動いていき、身を差し伸べるときには藻草のような髪が垂れ、それが岩礁の中で、果物の中の葉のように蒼々と見えた。⁶⁾

その人魚の形が、両肢の癒合した一本肢という、一種の畸形であることも熟知しているのだけれど、それとて、彼の夢を妨げる何ものでもなかったのである。⁷⁾

「猫のようなしなやかさで動く」、この人魚についての形容は、小栗虫太郎が最初である。なおこの作品を含めた小栗虫太郎の初期の作品について東雅夫は、以下の如く分析する。

虫太郎は西洋のサーカスに並々ならぬ関心を寄せていたようだし、「オフエリヤ殺し」や「人魚謎お岩殺し」などに見られる芝居仕立てにしても、大劇場の舞台というより、場末や野天に小屋掛けするグラン・ギニョール風血みどろ劇の趣が濃い。…「石神婦意人」は、ベトちゃんドクちゃん以来、わが国のお茶の間でもすっかりおなじみになった双体畸形—いわゆるシャム双生児のテーマに濃厚なレスビアニズムを絡め、“指操人形芝居”の趣向も取り入れた、虫太郎の見世物小屋趣味の見本帖のような、きわめつけの異色作である。虫太郎が、このシャム双生児のテーマに格別の関心を寄せていたことは、後の「但利伽羅信号」や「人魚謎お岩殺し」などに、ふたたびこのテーマを持ち出していることからもうかがえるが、そのほか矮人や巨人、せむし、半人半獣など、サーカスを昏くいろいろの花形たちは、虫太郎の作品にも欠かせない脇役たちであった。⁸⁾

IV. 大手拓次の詩「木製の人魚」(『藍色の墓』所収)

詩人大手拓次(1887年—1934年)は、群馬県磯部温泉の旅館の二男として生まれるが、幼くして両親を失い、地元の中学を卒業後詩人を志し、早稲田大学英文科に入学、北原白秋の詩やボオドレエルの『悪の華』の原書に魅せられ、大正元(1912)年卒業論文「私の象徴詩論」を提出する。大学卒業後、雑誌「ザンボア」、「地上巡礼」等に詩を発表するが生活の糧を得るには至らず、大正5(1916)年ライオン歯磨本舗広告部に入社し、以後死去する昭和9(1934)年までの約20年間勤務する。生前に発表された詩集はなく、代表作『藍色の墓』(昭和11年)をはじめ、『蛇の花嫁』(昭和15年)、『異国の香』(昭和16年)等いずれも大手拓次の死後、友人逸見享によって出版された。「人魚」が登場するのは、「木製の人魚」(『藍色の墓』所収)である。

こゑはとほくをまねき、

しづかにべにの鳩をうなづかせ、
よれよれてのぼる火縄の秋をうつろにする。

こゑはさびしくぬけて
うつろを見はり、
ながれる身のうへにほひをうつす。

くちびるはあをくもえて、
うみのまくらにねむり、
むらがりしづむ藻草のかげに眼をよせる。⁹⁾

他には大正元年に執筆された詩「人魚の笛」がある。最後の部分のみを引用する。

藍色の花を収めて、幻の国はうつらうつらと妖艶の肌を見せる。人魚の笛。一全く、幻の国は、聞いたこともない人魚の笛である。深く沈められ、抑へられた海鳴は、細い糸で私達の行方を導くのである。

人魚の笛は、ふりそそぐ悔恨の置土産である。人魚の笛は、産み月の女の夢である。

人魚の笛は、幼児の笑顔を集めた小箱である。¹⁰⁾

生前交際した文学関係者は、北原白秋、萩原朔太郎、室生犀星等極めて限定されたもので、それも一度か二度会ったにすぎなかった。彼は、生涯独身を貫き、ひたすら孤独を守り続ける一生であった。しかし大手拓次の描く詩の世界は、前述の詩にも顕著であるが、西欧的ロマンチズムの影響を受けた夢幻性やエロチズムの濃厚な世界である。

V. 中原中也の詩「北の海」(『在りし日の歌』所収)と丸山薫の詩「詩人の言葉」(『青春不在』所収)

30年の短い生涯を終えた詩人中原中也(1907年—1937年)は、立命館中学の時「ダダイスト新吉の詩」に出会いダダイズムのとりこになる。その後小林秀雄等との交際を通してフランスの詩人ランボオに傾倒する。昭和9年、第一詩集『山羊の歌』を刊行する。「人魚」が登場するのは、中原中也死後に刊行された第二詩集『在りし日の歌』(昭

和13年)所収の詩「北の海」である。昭和11年、わずか2歳でこの世を去った長男文也に捧げられたこの詩集は、その一年後結核性脳膜炎で生涯を終える中原中也の深い絶望感を表現している。

海にゐるのは、
あれは人魚ではないのです。
海にゐるのは、
あれは、浪ばかり。

曇つた北海の空の下、
浪はところどころ歯をむいて、
空を呪つてゐるのです。
いつはてると知れない呪。

海にゐるのは、
あれは人魚ではないのです。
海にゐるのは、
あれは浪ばかり。¹¹⁾

北の海と人魚、この組み合わせは、少なくともアンデルセンの「人魚姫」等童話の世界ではいわば常識的になっている。しかし長男文也を失った中原中也の見つめる北の海には、人魚の姿はなく、ただ人間を飲み込んでしまうかもしれない恐ろしい浪ばかりである。

この中原中也の詩「北の海」を、自身の詩で論じたのは、同時代の詩人丸山薫(1899年—1974年)である。彼は、処女詩集『帆・ランプ・鷗』(昭和7年)から、詩集『連れ去られた海』(昭和37年)まで海をよんだ詩が多く、海の詩人とよばれる。海の生物「人魚」が登場するのは、詩「詩人の言葉」(昭和27年刊行の詩集『青春不在』所収)と詩「晝の海」(昭和18年刊行の詩集『点鐘鳴る所』所収)である。

いまは亡き中原中也が言った
「海には人魚はいないので
海にいるのは
あれは波ばかりです」と

この言葉は不思議に
私の胸に生き生きしている

この言葉を繰り返して唱えようと
言葉のあわいから人魚の顔が覗いて出る

この言葉を^{つぶや}呟きながら
去りし日の南の航海を思い起すと
海づらの青い高まりに
無数の人魚の手と尾が見え隠れする

また 曇り日の荒磯^{ありそ}に佇^たって
この言葉をぼんやり考えていれば
うちよせる泡のはじけが
みんな人魚の溜息にきこえる

いまは亡き中原中也が私に遺した
波という言葉は人魚になった
人魚という言葉は
波になった (「詩人の言葉」¹²⁾)

こんな明るい晝間です
海づらにふしぎな歌がきこえるのは
波の間から人魚があらわれて
^{つな} ^{もた} 索に凭れてうつらうつらする
若い水夫のそばをとおりぬけるのは

波は速いのです
波には鱗や尾があるので
波は泳いでいるのです

泳いでいるのは あれは人魚です
人魚は波にのつてくるのです
すぐに遠くへ行ってしまうのです

私がちよつと眼をつむつた^ま間に
海の色は
きょうが暮れて明日^{あす}になつたように変わつた
波にはたくさんの影が出来た (「晝の海」¹³⁾)

いずれも中原中也の詩「北の海」を念頭に置いたと思われる。中原中也の見ている海は北の海、一方丸山薫の見ている海は南の海、なぜか、丸山薫の視野には「無数の人魚の手と尾」がしっかりと

らえられている。昔から人魚に擬せられたジュゴンの棲息するのが南の海だからであろうか。しかし井原西鶴の作品に登場する人魚は北の海で発見されている。深い絶望の淵にいる中原中也の目には、人魚もまた浪にのみこまれ、浪以外のものは一切写らなかったのであろう。

VI. 太宰治の小説「人魚の海」(『新釈諸国断所収』)

太宰治(1909年—1948年)の作品で人魚が登場するのは、短編小説「人魚の海」である。この作品は、最初雑誌「新潮」(昭和19年10月号)に発表されたが、その後他の11篇の短編小説とともに、創作集『新釈諸国断』(生活社)にまとめられ、昭和20年1月に刊行された。時期は太平洋戦争の末期、太宰治は、妻と誕生したばかりの長男正樹とともに、甲府の妻の実家から三鷹に帰り、空襲と生活物資の窮乏に悩まされながらも、束の間の安堵感にひたっていたのである。

さてこの短編小説についてであるが、太宰治自身作品の最後でことわっているように、井原西鶴の浮世草子『武道伝来記』(1687年)の巻二の四、「命とらるる人魚の海」を素材としたいいわゆる翻案小説である。日本や外国の古典などを、筋や事件を原作のままにして、人名や地名など他の部分を完全に自分の作品に書き換えてしまうというこの小説形式は、太宰治が最も得意とした創作方法である。例えば「走れメロス」(昭和15年)は、ドイツの詩人シラー(1759年—1805年)の物語詩「人質」Die Bürgschaft(1798年)を、『斜陽』(昭和22年)は愛人太田静子の「斜陽日記」を素材とした翻案小説である。

それでは多数ある古典の中から、なぜ創作のための素材として太宰治は井原西鶴の作品を選んだのか。『新釈諸国断』の「凡例」で太宰治は井原西鶴を「世界で一ばん偉い作家」と評価し、井原西鶴に対する関心の高さを示している。

西鶴は、世界で一ばん偉い作家である。メリメ、モオパッサンの諸秀才も遠く及ばぬ。私のこのやうな仕事に依つて、西鶴のその偉さ

が、さらに深く皆に信用されるやうになつたら、私のまづしい仕事も無意義ではないと思はれる。¹⁴⁾

以下「人魚の海」解明のため、素材となった井原西鶴の「命とらるる人魚の海」との関係について分析する。

「人魚の海」が井原西鶴の「命とらるる人魚の海」を素材とした翻案小説であることはすでにのべたが、それでは太宰治がこの素材をどこまで生かしどこからが彼の創作なのか。このことの確認のため、作品の概要、および作品で中心的な役割を果たしている人魚の描写についてその相違点を分析する。分析の手始めとして、まず両作品の冒頭部分を以下に引用する。

後深草天皇宝治元年三月二十日、津軽の大浦といふところに人魚はじめて流れ寄り、其の形は、かしらに細き海草の如き緑の髪ゆたかに、面は美女の愁へを含み、くれなゐの小さき鶏冠その眉間にあり、上半身は水晶の如く透明にして幽かに青く、胸に南天の赤き実を二つ並べ附けたるが如き乳あり、下半身は、魚の形さながらにして金色の花びらとも見まがふこまかき鱗すきまなく並び、尾鰭は黄色くすきとほりて大いなる銀杏の葉の如く、その声は雲雀笛の歌に似て澄みて爽やかなり、と世の珍しきためしに語り伝へられてゐるが、とかく、北の果の海には、このやうな不思議の魚も少からず棲息してゐるやうである。(太宰治)¹⁵⁾

奥の海には、目なれぬ怪魚のあがる事、其例おほし。後深草院、宝治元年三月二十日に、津軽の大浦といふ所へ、人魚はじめて流れ寄り、其形ちは、かしらくれなゐの鶏冠ありて、面は美女のごとし。四足、るりをのべて、鱗に金色のひかり、身にかほりふかく、声は雲雀笛のしずかなる声せしと、世のためしに語り伝へり。(井原西鶴)¹⁶⁾

この冒頭部分の中心をなす人魚の描写の比較は後にゆずることにして、作品全体を通して顕著な特徴は、太宰治の叙述が井原西鶴の二倍以上もある

ことでも明らかなように、簡潔・明快な井原西鶴に対して太宰治の場合には解説的で心理描写が少なくないことである。このことは、「人魚の海」だけの特徴ではなく、「走れメロス」など太宰治の翻案小説の多くにみられる特徴で、前述の「凡例」で、太宰治は以下の如く弁明する。

これは西鶴の現代訳といふやうなものでは決してない。古典の現代訳なんて、およそ意味の無いものである。作家の為すべき業ではない。三年ほど前に聊齋志異の中の一つの物語を骨子として、大いに私の勝手な空想を按配し、「清貧譚」といふ短篇小説に仕上げ、この「新潮」の新年号に載せさせてもらった事があるけれども、だいたいあのやうな流儀で、いささか読者に珍味異香を進上しようと努めてみるつもりなのである。¹⁷⁾

それでは、太宰治が「勝手な空想を按配し」、「読者に珍味異香を進上」した結果はどうなったか、以下に原作である井原西鶴の作品との相違点を列挙する。

(1) 副題「諸国敵討」で明白なように、敵討が作品の主題（井原西鶴）であるのに対し、物語の最後に「此段、信ずる力の勝利を説く」が付加され強調されているほか、文中にも「武士には、信の一字が大事ですぞ」があり、単なる「敵討」ではなく、「信ずる力」、すなわち「信義」が主題（太宰治）。

(2) 「横目の野田武蔵、上意にてかけ付」や「武蔵道中を守護し、御前をよろしく申なし」とあり、金内の娘の百右衛門への正式な敵討ち（井原西鶴）であるのに対し、「殿の御許しも無く百右衛門を誅した大罪を詫び」や「この私闘おかまひなしと定め」により、八重の百右衛門に対する私的な復讐（太宰治）。

(3) 浪人増田治平を助太刀させ、大横目の武蔵は敵討に加わらない（井原西鶴）のに対し、上役武蔵自身が助太刀し、後に切腹して「私闘」の責任をとる（太宰治）。

(4) 金内の娘に名前がついていない（井原西鶴）のに対し、娘に八重という名前をつけ、「八重の家

にはその名の如く春が重なつた」と、娘の名前に深い意味を持たせている（太宰治）。

(5) 「金内寝間のあげおろせし女に、鞠」や「妾の鞠」とあり、鞠が金内の愛人（井原西鶴）であるのに対し、「鞠といふ小柄で伶俐な二十一歳の召使ひ」とあり、鞠は金内の単なる使用人（太宰治）。

つぎに物語の展開の上で中心的な役割をになっている「人魚」の描写について、前述の冒頭部分を中心に相違点を確認する。

(1) 人魚の形姿：太宰治は、「細き海草の如き緑の髪」や「胸に南天の赤き実を二つ並べ附けたるが如き乳」の部分が付加し、人魚を人間の女性に近い姿にするが、その一方で、原作にある「身にかほりふかく」の部分削除する。原作にない髪の毛を付け加えたことはともかく、髪の毛が一般的な黒髪とか金髪ではなくて、緑の髪なのが気になる。この表現は太宰治の「勝手な空想」ではあるまい。W.B. イェーツ、山村暮鳥、谷崎潤一郎等の作品にも認められるほか、古くは、例えば『太平記』の「翠（みどり）の髪を剃下し、紅顔を墨染にやつし給ふ」などの例があり、太宰治はいずれかを参考にしたと思われる。つぎに原作に比べ、常に解説的で冗舌な太宰治が「身にかほりふかく」の部分削除したのはなぜなのか。そもそも生きものの「かほり」を太宰治はどのようにとらえているのか。以下において特に女性の髪の毛の色と身体の「かほり」（匂い）に対する太宰治の考えをさぐってみたい。

「私は眼が覚めて、顔を洗ひながら、その妻の匂ひを身近に感ずる事ができる。」¹⁸⁾ これは小品「フォスフォレックスセンス」の一節であるが、以下では特に女性の匂ひについての描写を『太宰治全集第一巻』について調査する。視覚に訴える表現は少なくないが、嗅覚に訴える表現は、非常にまれである。

①男は、女の二三歩うしろまではしつて来て、それからのろろと歩いた。憎悪だけが感ぜられるのだ。女のからだぢゆうから、我慢できぬいやな臭ひが流れ出てくるやうに思はれた。（「陰火」）¹⁹⁾

②私は祖母に抱かれ、香料のさはやかな匂ひに酔

ひながら、上空の鳥の喧嘩を眺めてゐた。(「玩具」)²⁰⁾

③「日本髪は、いやだ。油くさくて、もてあます。かたちも、たいへんグロテスクだ。」(「雌について」)²¹⁾

「女人創造」に理由の一端が認められる。

①モオパスサンは、あれは、女の読むものである。私たち一向に面白くないのは、あれには、しばしば現実の女が、そのままぬつと顔を出して来るからである。²²⁾

②女が描けてゐない、といふことは、何も、その作品の決定的な不名誉ではない。女を描けないのではなくて、女を描かないのである。²³⁾

③私は、「あらまあ、しばらく。」なぞといふ挨拶にはじまる女人の実体を活写し得ても、なんの感激も有難さも覚えないのだから、仕方がないのである。私は、ひとりになつても、やはり、觀念の女を描いてゆくだらう。²⁴⁾

注意してみると、太宰治に限らず詩人の描く女性に、身の「かほり」を見つけるのは簡単ではない。舟人を誘惑してライン川の川底に引きずり込む「ローレライ」の武器は美しい声であり、王子さまと結婚して永遠の魂を得ようとした「人魚姫」でも身の「かほり」は武器にならないのか、そのような描写はない。好色物を多数発表した元禄時代の商人井原西鶴だからこそ「身にかほりふかく」と表現できたのであろう。同じ元禄時代でも井原西鶴の文学活動を認めなかったといわれる俳人松尾芭蕉では考えられないことである。

つぎに(2)人魚の出現状況：場所は北の海(津軽の大浦)、時期は宝治元年(1247年)3月20日。「白波二つにわれて」、「波二つにわかりて」など太宰治と井原西鶴は、人魚出現時の状況についてほぼ同じ表現を用い、人魚の出現を嵐の前兆ととらえている。井原西鶴が人魚を「怪魚」と表現した部分を太宰治は削除する。太宰治にとって人魚は「怪魚」ではなかったのであろう。

なお寺西朋子「太宰治『新釈諸国噺』出典考」によれば²⁵⁾、太宰治が「人魚の海」執筆の際に、『武道伝来記』の巻三の三、「大蛇も世に有人が見た様」

と『本朝二十不孝』の巻二の三、「人はしれぬ国の土仏」も参照したことを指摘している。

VII. おわりに

本論では、日本を含め世界中が戦争に巻き込まれた昭和20年までの暗く殺伐とした昭和時代の前半期を対象に、小説など文学作品に描かれた「人魚」像について種々分析を試みた。巖谷小波の童話『天の橋姫』については、アンデルセンの「人魚姫」や『絵のない絵本』の影響を指摘した。しかしアンデルセンの「人魚姫」に描かれた世界は、王子が住む人間界、人魚姫が棲む海底、「永遠の魂」を持つ人間が死後にいく天上界と明確に三つに分けられているのに対し、巖谷小波の「天の橋姫」に描かれた世界は、人間の住む人間界がなく、月姫の住む天上界と人魚や龍王の棲む海底に分けられているだけで、さらにこの二つの世界は、虹の橋を利用すれば容易に行き来が可能である。天上界には兎などの動物も住んでおり、天上界と海底の間には越えることのできない壁は存在しない。キリスト教を基盤とするアンデルセンの童話との大きな相違である。

小栗虫太郎の探偵小説『人魚謎お岩殺し』については、「人魚」は作品にほとんど登場しないが、見世物小屋浅尾里虹一座の出し物「東海道四谷怪談」の上演中に起きた殺人事件解明の重要な鍵を握っている。座長浅尾里虹は、花形役者であった頃、畿州公姉川探鯨の正室薄雪の方と不義を犯し琉球列島の孤島に島流しになる。その時彼は、島にすむ人魚と関係もち子供が二人生まれるが、この子供が後に発生する殺人事件を解く鍵となる。なおこの作品に登場した人魚の容姿は、従来描かれている「美しい女体」であるが、「猫のようなしなやかさで動くこれまでの「人魚」像にはない特徴を持っている。

詩に描かれた「人魚」像についても取り上げた。詩人大手拓次の官能的なサンボリズムの「人魚」像、ランボオに傾倒した中原中也の詩「北の海」と「北の海」を論じた海の詩人丸山薫の「人魚」像も論じた。中原中也は、「海にあるのは、あれは人魚

ではな]くて、「浪ばかり」だという。それでは人魚はどこにいるのか。丸山薫は、南の海で「無数の人魚の手と尾」を見たと言す。しかし丸山薫が見た人魚も中原中也には、浪に見えるのではないだろうか。

井原西鶴の浮世草子「命とらるる人魚の海」を翻案した、太宰治の小説「人魚の海」についても、両作品を比較し論じた。「走れメロス」をはじめ太宰治の翻案小説の特徴といえる、解説的で心理描写が少なくないといわれる作品の傾向は、この作品においても認められるが、なぜか井原西鶴の「命とらるる人魚の海」にあった「身にかほりふかく」の部分太宰治に無視されるのである。太宰治ばかりではない。同様に「命とらるる人魚の海」を参考に物語詩「人魚の海」を創作した蒲原有明の場合にも人魚の体臭についての記述はない。詩人にとって、創造上の生物といわれる「人魚」に、体臭は必要ない、いな想像すらできないことなのであろうか。このような解釈が許されるなら、日本、いな世界の文学作品でもほとんど認めることのできない人魚の体臭について、あえて言及した井原西鶴は、世界でもまれな、太宰治の言葉をかりれば、「最も写実的な作家」(「古典竜頭蛇尾」)²⁶⁾なのである。

(2008年10月6日受理)

注

- 1) 巖谷小波『小波お伽全集、第二巻少女篇』(小波お伽全集刊行会、昭和3年) p.1
- 2) 同前掲書。p.2
- 3) 同前掲書。p.361
- 4) 『小栗虫太郎全作品④ 二十世紀鉄仮面』(沖積舎、1997年) p.320
- 5) 同前掲書。p.325
- 6) 同前掲書。p.309
- 7) 同前掲書。p.321
- 8) 東雅夫「見世物小屋の方へ」(紀田順一郎編『小栗虫太郎ワンダーランド』沖積舎、1990年) pp.54-55
- 9) 『大手拓次全集、第一巻：詩1』(白鳳社、1970年) p.688
- 10) 『大手拓次全集、第四巻：詩4』(白鳳社、1971年) p.33
- 11) 『中原中也全集、第一巻、詩I』(角川書店、1979年) pp.219-220
- 12) 『日本の詩歌24.丸山薫、田中冬二、立原道造、田中克己、蔵原伸二郎』(中央公論社、昭和49年) pp.85-86
- 13) 「現代詩集・丸山薫集」(『現代日本文学全集89』筑摩書房、昭和33年) p.353
- 14) 『太宰治全集、第十巻』(筑摩書房、1990年) p.378
- 15) 『太宰治全集、第六巻』(筑摩書房、1990年) p.315
- 16) 麻生磯次、富士昭雄編『対訳西鶴全集、武道伝来記』(明治書院、昭和53年) p.77
- 17) 『太宰治全集、第十巻』 p.378
- 18) 『太宰治全集、第八巻』(筑摩書房、1990年) p.380
- 19) 『太宰治全集、第一巻』(筑摩書房、1989年) p.119
- 20) 同前掲書。p.209
- 21) 同前掲書。p.346
- 22) 『太宰治全集、第十巻』 p.120
- 23) 同前掲書。p.120
- 24) 同前掲書。p.120
- 25) 寺西朋子「太宰治『新釈諸国断』出典考」(『広島大学「近代文学試論」第11号』昭和48年) pp.38-39
- 26) 『太宰治全集、第十巻』 p.74



巖谷小波の童話『天の橋姫』の挿画（室野琢磨作）

Das Bild der „Seejungfrau“ in der Showa-Zeit (1) : Über das Bild der „Seejungfrau“ unter dem Militarismus

KUZUMI Kazuo

In der ersten Hälfte der Showa-Zeit vom Jahr 1926 bis zum Jahr 1945 wurde der Krieg überall in der Welt geführt: Manshu-Vorfall (im Jahr 1931), der Geburt der Regierung von Hitler in Deutschland (im Jahr 1933), der Ausbruch des „Zweiten Weltkriegs“ (im Jahr 1939) und das Stürzen in den „Taiheiyō-Krieg“. Diese Tendenz der Zeit ist der literarischen Welt selbstverständlich nicht fremd. Die Literaten, die die proletarische literarische Bewegung wie KOMAKI Oumi und KOBAYASHI Takiji usw. machten, riefen den Pazifismus. Andererseits hielten die Literaten von der Partei „Shin-kankaku-ha“ wie YOKOMITSU Toshikazu und KAWABATA Yasunari von der Tendenz der Zeit Abstand.

Nun werden in diesem kleinen Aufsatz für die Erläuterung des Bildes der „Seejungfrau“ in der Showa-Zeit die folgenden Werke hauptsächlich untersucht.

1. Das Märchen „Amanohashi-hime (天の橋姫)“ von IWAYA Sazanami und Andersen's Märchen wie „Ningyo-hime (人魚姫)“ und „E-no-nai-ehon (絵のない絵本)“.
2. Der Detektivroman „Ningyo-nazo-oiwa-goroshi (人魚謎お岩殺し)“ von OGURI Mushitaro.
3. Das Gedicht „Mokusei-no-ningyo (木製の人魚)“ (in „Aiiro-no-hiki 藍色の暮“) von OTE Takuji.
4. Das Gedicht „Kita-no-umi (北の海)“ (in „Arishi-hi-no-uta 在りし日の歌“) von NAKAHARA Chuya und das Gedicht „Shijin-no-kotoba (詩人の言葉)“ (in „Seishun-fuzai“) von MARUYAMA Kaoru.
5. Die Novelle „Ningyo-no-umi (人魚の海)“ von DAZAI Osamu und die Novelle „Inochi-toraruru-ningyo-no-umi (命とらるる人魚の海)“ von IHARA Saikaku.